

あそび

9

2008



愕然と晩年がくる紫蘇の束
きみえ

愕然と晩年がくる紫蘇の束

高田きみえ

あを

九 月



カバ

破蓮ペリカンの入る餘地のあり
しら鳥の白で無き箇所十二月
日本にてふて寢の河馬に冬ひと日
炎天の辨當の蓋カバ啼けり
立秋のくるくる回るカバの耳

本三宮前

佐藤喜孝

神主の衣清しく茅の輪かな
高層の灯りそれぞれ盆三日
佃では無縁仏も踊の輪
初めてのもんじゃ焼だね梅雨晴間
謙信も越えし峠に下野草

所沢

須賀敏子

本三宮前

鈴木多枝子

約束の百合の種持ち同窓会
種蒔いてより三年目百合の花
花菖蒲迎への舟の近づきぬ
どの顔も風を楽しむ花菖蒲
鯉幟休耕田を埋めつくし

佃島盆踊

浦和

竹内弘子

路地ふかく処々の蛇口も涼しげに
盆をどり丹塗の小橋わたりゆく
掛声のいっそ淋しき踊かな
念仏踊をはるとき来て終りけり
あたらしき葭簀に囲ふ無縁仏

星 祭

田端 田中藤穂

竹活けし部屋青々と星祭
半夏生己の手足生臭し
美容室日除の下の茄子の花
こんなところに浦島伝説夏の雲
遠い夏兄の書棚の「蟹工船」

念 仏 踊

白金 東 亜 未

先づ手真似念仏踊の輪に入る
手の力脱けて踊の膝と足
仮装の子ニツと笑ひて踊りけり
盆唄の錆声ふつと父のこと
もしや父に押され念仏踊かな

滴りや重畳の岩行の聲
滴りにびたり張りつく白装束
滴りの絶え間なく降る溪の木木
滴りをふくみて苔の窮まれり
干涸らびて蚯蚓三和土にちぢこまる

四日市
長崎桂子

夏ゆくや

夜蝉泣く防衛庁を通るとき
逍遙も荷風も通りのうぜん花
氾濫や百日紅が明るすぎる
長い列あれば並んで夏期休暇
私にも百歳の夢夏ゆくや

新宿
堀内一郎

半夏草

新宿 森山のりこ

風通るプラチナ通り半夏咲く
染分けは神のいたずら半夏草
半夏の日違はずに咲く半夏草
江戸つ子の好みの色よ遠花火
思ひ出も共に消え去る遠花火

若竹

上高田 森理和

若竹の小路ふはふは人力車
若竹や真空パツクのやうな路
若竹の音を遮る小路かな
万緑や流れは広く堰浅し
金蚤と動くと負けよ睨めっこ

群なしてどこから来たの濁り鮒
木洩日や地蔵に垂れし蜘蛛の糸
朝顔の一輪まじり大野原
薄紅に木の葉ひかりて青簾
朝涼や大樹のそばを通り過ぐ

見沼 山莊慶子

知 床

濃淡の緑揺れ合ふ夏の湖
くつきりと熊の爪跡たもぎ茸
北きつね鼠銜へて夏の夜
ゆくほどに視界せばめて夏霧湧く
木道にポンと飛び出す青蛙

本三西 吉成美代子

本三宮前

吉弘恭子

黄昏の一葦の水に団扇かな
天を衝くあまつ水から裏話
戯書にひとすぢ音書遺書いんしよに紙魚
余所者にわからぬやうに濃あぢさゐ
滑坂をころげ転げて柿の花

石段を声のみ登り来る暑さ
夏うぐひす肩の力を抜いて聴く
まへうしろ日照雨けぶるや山蛙
浴衣着し影を吾かと見やりけり
送り火に溝の明からむ母の国

鹿手袋

渡邊友七

暑

夏の蝶ゆらりと戻る葉陰かな
山百合の香の届きけり露天風呂
芸要らぬテレビ番組大早
頭頂と日傘の間の風の道
髪切りて水羊羹を玻璃の皿

清瀬 赤座典子

あぢさゐの花まもる葉の毒もてり
足湯して茹蛸のごと足ならぶ
熱風の坂登り来て一息す
西日までくまなく当る角の家
ソロで聴くハープの響き夏館

桜ヶ丘 安部里子

祭

子を背負ふ夫に神輿を担ぐ妻
焦らずに生きると決めし青ぶだう
風鈴のえらびし風や禍福なし
転生を信じひと夜の花夕顔
鴉居て片足上げる草いきれ

向島 遠藤 実

日は中天前も後ろもなき酷暑
よく折れる鉛筆の芯溽暑かな
太陽の白きを過るつばくらめ
あいさつの姿よき人半夏生
団扇風子に送る母眼は遠く

逗子 鎌倉喜久恵

川崎大師風鈴市

川崎 木村茂登子

風鈴と御詠歌の鐘ご縁日
芭蕉の匂ひるがへしひるがへし鳴る風鈴
風鈴市風小気味良く通り抜け
手をつなぐ母子の姿風鈴市
購へる風鈴提げてゆく男

不機嫌をふきとばしたり梅雨晴間
片陰のすぽーんと消えて再開発
心做し大きくなりて墓
席譲られ次で降りけり額の花
抜かれパンジー甦りをり梅雨入かな

白金 齊藤裕子

けだる気な猫の流し目宵風鈴
お見込のたふり昼寝の腕枕
いつくしみの広がってゆく天花粉
卵のむ夫二つ飲む大暑の日
賞味期限切れなどは無しサンドレス

銀座
篠田純子

ほどほどに遣り過す夏草枕
終世を箱枕の母蓮の花
夕顔や赤い泪の目病み猫
七月や足おぼつか腕を振る
明治無く端居に大正昭和かな

千駄木
芝尚子

宝泉寺前

芝宮須磨子

七夕や昔に帰る術はなし
欠け焙烙ひき出して焚くお迎へ火
枕の位置何度も変へて短き夜
仕りし田植なつかし鎮守様
みすずかる信濃は夏と恋文に

輪島

定梶じよう

一日ぢゅう雨のビニール簾かな
昼寢覚ところであんた何方です
どこかより雅楽が聞こえ裸かな
梅雨明けか赤きクレーンの腕伸びきる
炎天を来て吊鐘がしんとある

近世俳諧と漢詩文 2 拾壹

王岩

題 飲中汝陽

菊の露見とれて涎ながしけり

梅室

梅室は桜井氏で、明和六年（一七六九）～嘉永五年（一八五二）。本名は能充で、別号に雪雄・素信・方円齋などがある。自選句集『梅室家集』があり、問題の句はここに載る。句題と句の描写から考えると、この句題は『唐詩選』に載る杜甫の「飲中八仙歌」を基にして梅室が自己流に組み合わせたものである。

知章騎馬似乗船 知章は馬に騎ること 船に乗るに似たり

眼花落井水底眠 眼は花し 井に落ちて 水底に眠る

汝陽三斗始朝天 汝陽は三斗にして 始めて天に朝す
道逢麴車口流涎 道に麴車に逢ひて 口より涎を流し
恨不移封向酒泉 酒泉に移封せられざるを恨む
……

「飲中八仙歌」は最年長の賀知章を筆頭に置き、以下、官位や爵位の高い方から並べて詩に詠んだものだ。賀知章は（酒に酔って）馬に乗る姿は、あたかも船に揺られているようだ。醉眼朦朧として井戸の中に落ちても、そのまま水の底で眠っている。

汝陽王（玄宗の甥）李璣（？〜七五〇）は、酒を三斗（約三升）飲んでからやつと朝廷に参内する。その途中、麴を積んだ車に出会すと、また口から涎を垂らして、酒泉に領地替えにならないのを残念に思っている……

酒泉は甘肅省にある郡で、名泉があつて、その水の味は酒のようだったという。

梅室の「題飲中汝陽」は杜甫の「飲中八仙歌」をまね、その第二三句を生かして、自句を詠んだわけである。菊の露から酒を連想させ、涎を垂らした酒好きの汝陽王のイメージを生き生きと描き出した。様になる受容であろう。



元日や人の妻子の美しき
門ありて国分寺はなし草の花
ふゆの夜や針うしなうておそろしき
つばき落ち鶏鳴き椿また落ちる
蜻蛉の羽にも透くなり三上山
蜻蛉や帆柱当てに遠く行く
元日や鬼ひしぐ手も膝の上
買うたほどこぼして行きし若菜かな
背高き法師にあひぬ冬の月
乳を隠す泥手わりなき田植かな
糊の干ぬ行燈ともす寒さかな
名月や草木に劣る人の影
御さがりやここぞと開く朱傘かちかき
指につく屠蘇も一日匂ひけり
野に笑ひ山にわらふや初子の日
買ったほどこぼして行しわかな哉
見て置いて探しにやるや露の臺
高鳴をして夜に入ぬかゝり紙鳶
ほそ道の末はしれけり梅の花

家あれど戸窗のなくて野梅かな
うぐひすも山水も野に出でにけり
田八反ひばり十丈庵五尺
たふれ木に添てめぐるや春の水
手にとればはやにこにこと売雛
馬のみゝすぼめて通すつばめかな
乞食も蝶も日長し下河原
そもそもといふ行儀にて初かはづ
菜の花や屋根に鶏蛙に猫
跡もどりして鐘きくや花の中
人さらば一ゆるみしてちるさくら
空耳に人声すなり夜の花
旅駕にうしろ窗なし花の中
枝ぶりはともあれ花はさくらかな
ひとつ哥いく世もうたふ茶摘かな
水底の草も花さく卯月かな
閑静をほめて昼蚊にさされけり
昼の蚊や机の下のかくし酒
蚊屋つれば蚊もおもしろし月に飛

佃の盆

篠田純子

かぶと虫見せあつてゐる盆の夜

俳縁奇縁もんじゃの焦げと生ビール

夜釣する人の背中に盆太鼓

魂棚のお鈴の湿る佃島



盆の月狐の唄ふなむあみだ

藍ゆかた姉が廿二で妹がはたち

結界のあやふやになる夜の秋

盆踊つばさを交す影のあり

ざっぱんざっぱん舟すれ違ふ盆の月

二日ほど盆唄棲める後頭部

かやねずみの正體は影去年今年
弔ひの人くちぐちに虹称ふ
一病を持って集ひし夏半ば
物置を遠まはりして茄子畑
梅雨しとど身体髪膚DNA
夏至の夜の雨音ざわと高まれり
未明より音高くせり走り梅雨
足どりのゆるゆるとなり青葉闇
冷房にきて午後のひげ伸びはじむ
夫の忌や紫陽花の花ありつたけ
睡蓮の池をくまなく青大将
青柿のぼとりと一つ朝の雨

佐藤喜孝
定梶じょう
須賀敏子
鈴木多枝子
竹内弘子
田中藤穂
東亜未
長崎桂子
堀内一郎
森山のりこ
森理和
山莊慶子



前月作品

限笹に添うて緑蔭深くなる	吉成美代子
半天をうすむらさきのおふちかな	吉弘恭子
ホトトギス大志秘かに継がんとす	渡邊友七
雨上る凌霄の花上向けり	赤座典子
梅雨晴間銀座でランチしてきたる	安部里子
笛の音のまだぎこちなき夏氷	遠藤 実
草も木も雨も匂ひて五月闇	鎌倉喜久恵
あぢさゐの濃き紫やひばりの忌	木村茂登子
おむすびの塩まだらなり夏木立	斉藤裕子
汐入の堀の匂ひや朝曇	篠田純子
申し分なくながらへて微びにけり	芝 尚子
子等と行くふるさとの道若葉風	芝宮須磨子

喜孝 抄



八月作品より

田中藤穂

立ちつくすバイソン冬の苦髪かな
佐藤喜孝
することもなく四つ脚で冬を立つ

バイソンは日本流に言えば野牛だが、日本にはいない動物である。一月に“あを”の吟行で行った動物園での作である。その姿形、毛の色、毛の生え方をみても、北米やヨーロッパの大草原が似合う野獣だ。今、日本は上野の動物園の囲いの中で、明け暮れ見物人に見られながら日を送っている。バイソンは何を思いながら立ちつくしているのだろうか。苦労があると早く伸びるといふ苦髪のようなあまり美しくない毛をまだらに伸して。

動物園はいろんな大陸の、日本には居ない動物を集めてみられるようになっていた。子供が小さな時などよく連れていった。図鑑を見るよりは生きて動いているのが見られるのは面白

いし有難いけれど、動物の身になってみれば、これ以上の迷惑はないとおもう。

それぞれの生息地に居たら、生命の危険も沢山ある中で、智恵を働かせ、体力を張って餌をとったり、繁殖のために相手を捜したり、忙しはずである。動物園では敵を警戒する必要もなく、ただ囲いの中で立つてゐるだけの生きざまは決して幸福ではなく……と書いてきたら、何だか今の自分に似ているのに気がついてがっかりした。

父の日するめ爰れば反りかへり

定梶じょう

アメリカから「母の日」「父の日」というのが入ってきたのは戦後のことである。

「母の日」は、母への感謝の贈物のカーネーションなどが街で売られて華やぐが、それに比べ「父の日」は何か添え物のようで地味な感じ

がする。

日本も戦前は父が大黒柱で、夕飯のおかずも父だけ一品多かったりしたのに、戦後六十年、女性の地位が上がっただけ、男性の地位は低くなったようだ。

じょうさんの句も、どこかちよつと拗ねた感じがあつて、可笑しい。

夫漬けてくれし梅干あと僅か

鈴木多枝子

ご主人はまめな方だったのですね。亡き御主人様が手をかけて漬けて下さった梅干を大切に食べていたのに、もう残り少なくなつてしまつた。その梅干には、お元氣だった頃の月日や会話や、愛情も思い出も一杯つまつていたのに。梅干がなくなつたら、いろんな物が手から離れてゆくような。

梅雨しとど身体髪膚DNA

竹内弘子

私は、脚がすらりと真直ぐな人を見ると、とても羨望を感じる。というのは、私の一族はど

うもそういうDNAがないのです。身体髪膚これを父母に受くといいますが、親子というのは本当によく似ていて、髪の毛上げ上がりかたから咳まで似ていて驚いたりがつかりしたりします。子供だつて、よい所だけを受けついでくれればよいのですが、なかなかそうはゆきませぬ。

梅雨しとどの季語に同感！

牛蛙日なか間のびし声交す

森 理和

声交すというのは一匹ではない。雌雄なのでしようか。始めて牛蛙の声をきいた時は、何だかわからなくて、あの異様な声に本当にびっくりしました。戦争が始つて食料がなくなつてきた時、女学校へ行く途中の肉屋さんの店先に異様なものがぶら下がりました。みるとそれは牛蛙（食用蛙）でした。気味悪いような可哀想なような、その店の前を通るときは、いつもそれを見ないようにして速足で通りました、今は牛蛙も捕られて食べられることもなくなつたと思

いますが、間のびした声でゆっくり鳴き交せるのは結構な事です。

佐渡泊波の高きにつばめ魚

吉弘恭子

佐渡という固有名詞に力があり、上五の佐渡泊で先づ詩情旅情をさそい、読む者をひきつけます。

旅館の前はすぐ海が展けていて、寛いでいる窓から飛魚が飛んでいるのを見ているのでしようか。

景が大きくて気持のよい一句です。

草笛に草笛応へくるは誰そ

渡邊友七

若き日の追想でしようか。草笛を吹いたらどこからか草笛が応えてきた。姿はまだ見えな。い。さあ誰だろう。そこから先は如何様にも想像がひろがる。小説の中の一齣の様です。

夜の秋付箋のページまたふやす

遠藤 実

猛暑の続いた夏だったが、夜はふと秋の気配

を感じられるようになった。作者はそんな夜を一心に読書、研究に励んでいる。『付箋のページまたふやす』でその様子がはっきりと目に浮んでくる。

草も木の雨に匂ひて五月闇

鎌倉喜久恵

五月闇は梅雨時の昼の暗さにもいうが、この句は夜のように感じる。草も木も茂った梅雨の闇の中に身を置いて、自然をたつぷりと感じ取っている。作者の生命力も感じられる佳句だと思います。

おむすびの塩まだらなり夏木立

斉藤裕子

この句の眼目は、塩まだらなりというところでしょう。これはコンビニで買ったものではない。わが家で炊いたご飯を、誰か家族の手でにぎったおむすびでしょう。それで少々塩のきついとこると薄いところがあるのですが、今時これほど貴重なものではありません。

ピクニックに出掛けたのでしようか。夏木

立、で元氣な樂しさもよくわかります。

子等と行くふるさとの道若葉風

芝宮須磨子

私の父の生家は須磨子さんと同じ山梨県です。今でこそ塩山から車で十五分もかからずに行けますが、昔は窪平というバス停で降りてから、たつぷり一里（四キロ）歩かなくてはいけませんでした。父に連れられて、或は迎えにきてくれた叔父と一緒に、大きくなってからは兄妹で、その一里の道を歩きました。その道のことはよく覚えています。

沢を下って飲んだ川の水、木橋から見下ろす川べりにさるすべりの大木があつて、紅い花を一杯に拵げていたこと。玉蜀黍畑は背が高く、風が通るときやさやといひ音を立てたこと。麻畑はもつと背が高く、まつすぐに空に伸びていたこと。夕暮の赤とんぼの群は大河の流れのようで顔にぶつからないかと心配したこと。畑の桑の葉が夏の太陽を浴びてキラキラ光っていたこと。

村の入口に祠があつて、父がここが村境だと教えてくれたこと。小さな山あい村では人が入ってくるとすぐ見えると思えて、そちこちの農家から誰か出てきて、父と田舎言葉で挨拶を交していたこと。父の表情がいつもより和んで、すっかり山梨の人に戻っていたこと。

おばあちゃんの家の外には薪が一杯積まれていたこと。土間があり座敷には囲炉裏があり、裏には釣瓶井戸があつて、トイレはいちいち下駄を履いて外へ行ったこと。屋根裏のお蚕部屋へゆくと、蚕が桑の葉を食べる音がまるで小雨の降るように聞えたこと。きりなくいろんな思ひ出が浮んでくる。

須磨子さんは子供さん達と一緒に故郷の道を歩いている。懐かしい故郷のことを思い浮べたり、教えたりしながら。

甲斐の山々もすっかり緑に包まれて、気持のよい若葉風が吹いてくる。須磨子さんにもお子さん達にも忘れがたい思ひ出になることでしよう。至福の一時です。

地球

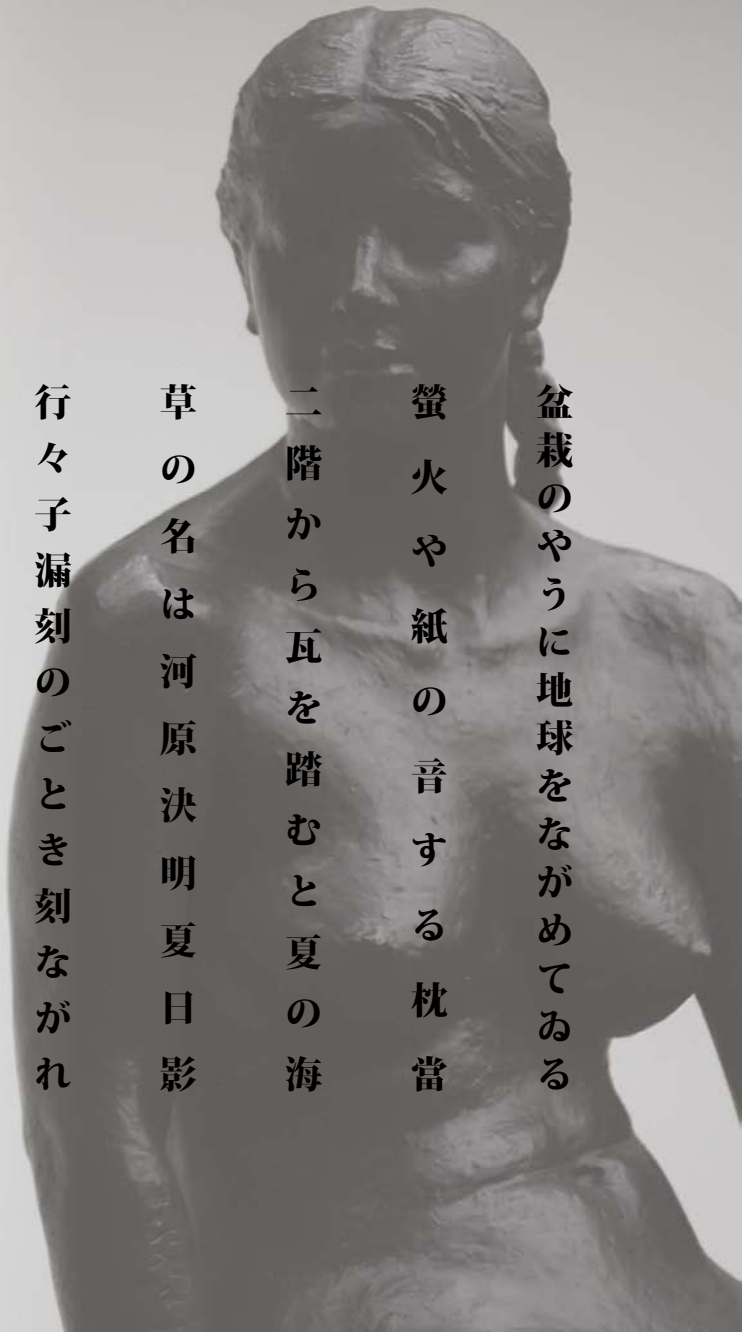
佐藤喜孝

夕茅花砂のつまりし忘れ貝

七月来る影をひとつひとつ置き

忽ちに意識のもどる草いきれ

ひとりごとの男がすぎて晝顔しん



盆栽のやうに地球をながめてゐる
螢火や紙の音する枕當
二階から瓦を踏むと夏の海
草の名は河原決明夏日影
行々子漏刻のごとき刻ながれ
膝蓋をこめかみとして夏の道
テレビでは野茂が引退冷奴

あをかき集

竹内弘子選

(六人目以降五十音順)

白玉かすいとんか作りつつあり
妻の練る辛子が怖し朝曇

夏の旅空気枕をたづさへて

白塗の狐も混じり盆踊

夜の葦まだつづきぬる盆踊

白提灯亡者手つきの盆踊

泡溢れ生きておしかば生ビール

靴一つの旅の身に添ふつばくらめ

雨後の風まぶし初蟬身ほとりに

あめんぼや音なくゆくは門の川

妻を呼ぶ荒声や紫蘇花こぼす

暑き日や虫の喪へ寄る蟻の群

踊の輪ゆらりゆうらり十三夜

魂まつる櫓太鼓の喰れ声

精霊棚に猫の顔して手を合はす

大方を素足の靴で済ませけり

朝つみの胡瓜かじりて熱をとる

梅雨明ける蝶の往来とかげ出る

田中 藤穂

渡邊 友七

赤座 典子

安部 里子

小さき手に筆持ち願ふ星祭

今年竹高だかと伸び戦ぎけり

月島のもんじゃ佃の盆踊

盆唄の響く霊棚無縁さま

ゆるやかな手振り佃の盆踊

議事堂の墓標に見ゆる朝曇

炎昼や背より正気の蒸発す

自転車の踵を返す日雷

大暑かな肉体労働者の夫婦

蝉しぐれ胸のつかへを流しけり

昼すでに月をはぐくむ合歓咲けり

古書買って帰る梅雨夕焼の中

展墓行徳用燐寸買ひにけり

芝 尚子

篠田 純子

定梶じょう

頭髮に火のつきさうな大暑かな

夏の夕猫渡るまで車とめ

垂直に暑さ落ちくるアスファルト

サングラス命綱なきエレベーター

祖父までが土葬の村に麦茶煮る

捨て切れぬ背広がありて花十葉

松籟に少し控へ目蟬時雨

ぼたぼたと夕日に落ちる白木樅

さよならの手で蚊柱を追ひ払ひ

二人して素足投出し遠花火

水の星涼しさを絵で見えるやうに

遠富士の良く見える日の月見草

暑氣払ふ冷茶に塩を一つまみ

藤波や千寿の源氏物語

一鉢より伸びたる鉄線窓格子

初生りの獅子唐七つ炒め飯

暑氣払ひサックス奏者の丸き爪

詫びる時のがしてしまひ軒風鈴

遠藤 実

鎌倉喜久恵

木村茂登子

斉藤 裕子

迎へ火やおぼえていてか帰り道

北国へ移住と決めて大夕焼

落日が怪しく光り灼けるビル

そばがら枕かかへて帰る夏の旅

新しき家に根付いて沙羅の花

左から廻る八の字茅の輪かな

大川の夜風に乗って盆太鼓

藍染の踊浴衣はしなやかに

妖精のやうな顔して蓮ひらく

迎へ火や賑やかなりし家族かな

水郷や江戸古種とあるあやめ咲く

熱風に煽られもして医者通ひ

野菜便先づ芋虫を探し出す

茶の灰の手入土用と師の訓

かあちやんと声にしてみる端居かな

屋上の鉢の収穫茄子一つ

暑き夜ピアノの音の耳に付く

夏休み学童嬉々として群れる

芝宮須磨子

須賀 敏子

鈴木多枝子

東 亜 未

長崎 桂子

田と畑の青点々と麦藁帽
炎天に働く人の尊しや

孟蘭盆会足元に影纏はりぬ
終業日鉢の朝顔持ち帰る

地平線ギユギユツと締まる夏キャベツ
藻の花や揺らす風きてゆれてをり

深夜便聴きつ土用の入と知る
庭隅に土をもたげて茗荷茸

松葉菊水琴窟を囲みけり
涼しさや宇治十帖を読みすすむ

美瑛の丘なだらかなりし麦の秋
賑はしき空港ロビー夏帽子

昼寝することも日課となりけり
地平迄一本道や斜里の夏

身ほとりにこゑがたくさん燕くる
青虫のなかぞらでまふ糸で舞ふ

恋猫のもてあましたる小半日
徘徊る猫の永き日はじまりぬ

森 理和

森山のりこ

吉成美代子

吉弘 恭子



ゆるやかな手振り佃の盆踊り 芝 尚子

七月半ば「あを」の人達と「佃の盆踊り」を見物しました。明暦の大火（振袖火事）で消失した西本願寺を再建すべく、海に近い葎の原の埋立工事に貢献した佃島の人達が、御堂の完成を期に始められた盆踊だそうです。

近年テレビなどで広く知られ、東京都の無形文化財にもなっています。

櫓の上で坐ったまま単調な太鼓を打ちつづける老人、スピーカーから流れる抑揚の殆どない踊歌。またの名を念仏踊ともいわれる所次です。

むかし「東京音頭」や「炭坑節」で踊った記憶しかない。「ゆるやかな手振り」はめずらしくて上

品に思えました。この地にある歴史と伝統を感じました。

議事堂の墓標に見ゆる朝曇

篠田 純子

東京にビルが林立しているのを「墓標」に擬らえた詩人はいませんが「議事堂」はそれ自体、金に飽かして造られた豪華な墓地のように見えないこともありません。がへ自転車の踵を返す日雷などを見ると、朝方のあの辺を自転車で走り廻っている純子さんが見えてきました。どれも面白く出ています。昼すでに月をはぐくむ合歓咲けり 定梶じょう

こうした詩情豊かな作品に出会うと、これまでに佳いと思っていた合歓の句のいくつかは色褪せる気がします。

七月ごろ、花軸が短いため小さな花が集まって球の形に開花する。淡紅色をぼかした容子は暮れ方でもあり喻えようのない美しさです。(白玉かすいとかか作りつつあり)も一流のじょうさん調で好きで

す。

泡溢れ生きてぬしかば生ビール

田中 藤穂

多分七月十五日の佃島盆踊へ行くまえ、もんじゃ焼に寄った時のことだと思います。

ごきげんで「生ビール」、共々に喜びたい気持ちがあります。「生きてぬしかば」と言わずにいられないところが人間探求派みたいで面白いと思いました。

靴一つの旅の身に添ふつばくらめ 渡邊 友七

お一人で長旅はなさらなくなったと思いますが、お若い頃は全国くまなく「旅」をされ、事業を拡大してこられた方です。ご子息に経営を任されて、今は悠々自適のお方です。

大方を素足の靴で済ませけり 赤座 典子

サンダルではない「靴」、おどろきです。

季節を問わず素足に靴のおしゃれな俳優がいるのは知っていました。やっぱり赤座さんは若くておしゃれなんだ、と思いました。

朝つみの胡瓜かじりて熱をとる 安部 里子

この夏の暑さは骨身にこたえました。平年なら朝夕は多少の涼気が感じられたのですが。近くに菜園があつて取れたての「胡瓜」がいただけるのでしよう。胡瓜は生食すれば身体の熱を去る、と漢方にあります。

祖父までが土葬の村に麦茶煮る 遠藤 実

平成のいまでも、地方によつては「土葬」があるかもしれない。その人が生れた土地なら、その方が自然な気がする。埋葬して日が経つと地面が細長く凹むそうだ。それも自然である。「麦茶煮る」がいいです。

ぼたぼたと夕日に落ちる白木樅 鎌倉喜久恵

以前、垣の隅に「白木樅」があつて、小さかった娘へ「道のべの木樅は馬にくはれけり」とおしえたりした。ほんとうに「ぼたぼた」と落ちた。地味がわるかつたせいかな数年間に枯らしてしまつた。

暑氣払ふ冷茶に塩を一つまみ 木村茂登子

信仰心の篤い方で、偶に交すことばの端々にひたごころのようなものを感じる。冷たいお茶には一つまみの塩を入れて飲むのが良いらしい。

十月の吟行、茂登子さんのお世話で、鶴見の総持寺へ行くのを心待ちにしています。

暑氣払ひサックス奏者の丸き瓜 斉藤 裕子

半世紀以上まえ、爆発的に流行したジャズ奏者。ジョージ川口の率いる「ビッグ・フォア」に、松本英彦という「サックス奏者」がいて、柔らかな音色がすてきでした。おもたそうな胴にある音穴の鍵を

押える指が見えたのでしよう。極上の「暑気払ひ」でしたね。

そばがら枕かかへて帰る夏の旅 芝宮須磨子

枕が変わると眠れない方ですね。蕎麦殻は軽いけれど嵩張る気もしますが安心して眠れるのでしようね。猛暑の日々、北国への旅に憧れます。

大川の夜風に乗って盆太鼓 須賀 敏子

やはり先程の佃島でしょうか。軒を連ねた家々の尽きる辺りが大川（隅田川）で、堤防を上がると対岸のビル（聖路加病院など）の灯が川面に映ってきれいでした。いくつかの屋形船が迂るように過ぎて行きました。

水郷や江戸古種とあるあやめ咲く 鈴木多枝子

管理された菖蒲園などは、品種ごとに名前を書いた木札が立っているようです。『藻しほ』などと古

典的な名があったのを覚えています。

かあちゃんと声にしてみる端居かな 東 亜未

このたび上梓された「最初の記憶」の東亜未さんの頁をひらき、読むほどに母君へのさまざまな思いが、他人ことならず胸に迫りました。その時あった事、みたまが率直に述べられていて感銘を受けました。「かあちゃんと声にしてみる」は、万人の心を打つ一行です。

炎天に働く人の尊しや 長崎 桂子

八月も終りにちかく、漸く猛暑を乗り越えた感じですが。今年の暑さは身にこたえました。外を歩いていて、この一句のような場面に会うと、同様の感じを持ちます。

終業日鉢の朝顔持ち帰る 森 理和

初節句の折、カフェ傳の句会で、きれいな吊り雛

を見せて頂いたお孫さんが小学生になって、夏休みになる前日「鉢の朝顔」を持って帰った？ ついこの間のことのように思っていたのに、おどろきました。

深夜便聴きつつ土用の入と知る 森山のりこ

わたくしも、何年も俳句をやっていて、同様のことがあるので、ほほえましく思いました。＼入り＼とか、明け＼がその都度わからなくなり、立秋の前十八日が夏の土用と、しつかり覚えてもすぐ忘れるようです。

昼寝することも日課となりけり 吉成美代子

夜更しの上に、このところのオリンピックで「昼寝」は欠かせません。万事ゆつくり時が動いていたような頃から「昼寝」の季語があつたのですから、夏場は日課でいいのでは。

身ほとりの声がたくさん燕くる 吉弘 恭子

まず、本誌を毎月発行していること。そのことに関わる煩雑なやりとりの数々。句会、吟行など、家事をこなしつつ忙しさは想像以上のものだと思います。「燕」を見て季節の移り変りを実感するのです。



七月の句会

傳

中野区 カフェ傳

一寸の蜘蛛の子逸す蠅叩
湧くごとく柴樽雨の夏の道
老犬を徳へばあはれ青葡萄
たそがれの一葦の水に団扇かな
炎屋や背より正気の蒸発す
若竹の小路ふはふは風山
片陰のすぽーんと消えて再開発
神主の衣美し茅の輪かな
青葦のさやりと傾ぐ沼の風
美容室日除の下の茄子の花
王監督の皺の涼しき夏来る
屋の蛾の重たき腹の通りけり
大正と昭和向き合ふ夕端居

茂登子 喜孝 寒林 恭子 純子 理和 裕子 敏子 綾穂 弘子 敦子 尚子

調

さいたま市岸町公民館

兄弟の揃ひて仏ヶ浦涼し
テレビでは野もが引退冷奴
乳母車浦和駅前油照
朝涼や大樹のそばを通り過ぐ
ちめ釣るや島また島の鞆の浦
間引かるる林檎のどれも嬰の顔
掛声のいっそ淋しき踊かな

綾子 喜孝 藤穂 慶子 敦子 友七 弘子

あを吟行会

佃島・盆踊

踊の輪無縁の仏祀られて

藤穂

魂棚や古老の唄の途切れなく
川風に乗って流れる踊の輪
踊の輪ゆつらりゆらり十三夜

念仏踊をはるとき来て終りけり
かぶと虫見せ合ふ子ども盆の夜
踊唄河口に月の留まり
手の力脱きて踊の膝と足
盆唄の響く霊棚無縁さま
父方を忘れがちなる盆踊
かすれぬし声ものどかに盆踊
闇を訪ひ路地なつかしき盆唄
寂声の口説歌なり数蚊刺す

七座句会

中野区・小川苑

約束の百合の種持つ同期会
枕の位置何度も変へて短き夜
すずしさを茅の枕にしたるかな
七月や足おぼつか腕を振る
冷奴世の淋しさを崩しける
午睡ともいえぬひととき腕枕
もしや父に押されて念仏踊の輪
人妻となりて緑のサングラス
籠枕みな亡くなつてしまひけり
二日ほど盆唄棲めり後頭部
夏の月澄み瀨枕の見え隠れ
遠い夏兄の書棚の蟹工船
先読むは困暮に任せる籠枕

夏子 敏子 典子 弘子 純子 敦子 東亜末 尚子 喜孝 恭子 一郎 綾子 多枝子 須磨子 喜孝 尚子 寒林 夏子 東亜末 木枯 綾子 純子 恭子 藤穂 理和

連句勉強会 毎月第1日曜
希望者は 佐藤喜孝まで
(090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
カフェ傳 森 理和
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
岸町公民館 竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会 十月十九日
詳細 8月号三七頁
総持寺

七座句会 毎月第4火曜
小川苑 吉弘恭子
(090-9839-3943)

先月の表紙は傳の池の金魚。今月は時期が少しずれたが、
蓼科吟行の折宿泊したペンションの喫煙所？前日は台風の
影響で雨が降ってゐましたが、この朝は清々しい空気で満
ちてゐました。バケツの形をした灰皿で一服、楽しい一日
がはじまる予感がしました。

扉の短冊の作者は高田きみえさん。『暖流』の大先輩です。
「題詠シリーズ」として一題五十句をワープロでまとめて遊
んでゐた時もお一緒しました。長く続いた句会でもお世話
になりました。少しきみえさんの句を並べてみませう。

硝子戸のそとの茂りに夕餉の灯
二階から手が出て時雨確かむや
晩年や葱に明かりを灯すべし
面つけて日灼けの顔の余りけり
あす植うる早苗の箱の吹かれぬし
紫陽花やなにせむとまた手を洗ふ

句集『霧笛』より

提灯と同じ臭ひの夕立傘
命断つホームに日傘など残し
梨棚にはいる日傘をたたみけり
ハーブ売る芽吹く林の露天市
くちなしやわれの悼句を誰が詠む
夏芝居膠のにほふかぶりつき

弟の体臭つよく帰省せる
子遍路の道にかがみて尿りをり
白シャツの二輛先まで通路見ゆ
山の子と道連れになり蝮草
先達は父の駄馬かも盆の道
コスモスの道へ戸ごと集乳缶

しばらく音信不通。この号が出来たらお送りしませ
う。
題詠シリーズ「傘・香・道」
(喜孝)

御芳志多謝
芝 尚子 様

二〇〇八年九月号
発行日 九月八日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090・9828・4244
印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹徳房
印 紙・製本・レイアウト カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130・655526(あを発行所)
乱丁・落丁お取替えます。

「あを」入会ご希望の方は下記まで。

自選作品は5句（作品により添削あり）

「あをかき集」は7句投句。

普通会员 10,000（年間）

インターネット会員（冊子無し）

5,000

連絡先

satou.yositaka@rouge.plala.or.jp



Café 傳

中野区上高田 1-1-1

03-3368-4263